



慶應義塾大学ビジネス・スクール

株式会社インクス2001

5

コンピュータがさまざまな分野に導入されるようになってから、すでに30年。しかし、ネットワーク・コンピューティングという概念がここまで身近なものとなり、コンピュータが、世の中の仕組みをこれほどまでに変化させると、誰が想像しえたでしょう。私たち incs は、こうしたネットワークの時代に、おそらくはハイ
10
スピードで変貌を遂げていくであろう工業の姿を“情報工業”と定義し、その未来形の研究を続けてきた企業です。かつて、蒸気機関の出現が工業のあり方を一変させたように、一元化したコンピュータとネットワークの活用が、明日の工業の姿をつくり変えるのです。生産能力そのものの価値は失われ、知的情報資源が価値をもつ“知的産業革命” 私たちは、今、そんな時代を生き
15
ているのです。そして、この変革をリードしていくのは incs である。(会社案内より)

2001年の初夏、株式会社インクスの山田眞次郎社長は、東京都新宿区にある高層ビルの
20
52階から都心のパノラマを見下ろしていた。山田社長は、時代の波——『情報工業化』と呼ぶべきもの——は確実に自分の方へ押し寄せていることを感じていた。

自動車や電機などの製品開発プロセスは、従来、図面をベースにして進行していた(付
属資料1：図面ベースの製品開発プロセス)。デザイン部門が作成する意匠図面、設計部
門が作成する製品設計図面、金型部門が作成する金型設計図面は、それぞれ別に存在し、
25
データの一貫性の保証はなかった。また、もともと3次元のものを2次元に展開するため、図面にはあいまいさや、つじつまがあわない個所が必ずあった。

1980年代終わりごろから、3次元CAD(Computer Aided Design：コンピュータ設計
支援)やコンピュータ・ネットワーク技術が進化したことにより、製品の形状やつくりか
た(工程)を定義する情報を、個別に作成される図面ではなく、3次元の一貫したデータ
30

本ケースは、横浜国立大学竹田陽子助教授によって作成された。本ケースの記述は経営管理の巧拙を示すものではなく、分析ならびにクラス討議の資料として作成されたものである。(改訂2001年7月)